

「文化継承と文学的表象のあり方とは？ ——金沢の街並み保存と石川県の風景表象・文化」

担当教員 竹本 研史

コース概要

日程 2019年9月10日～13日

場所 石川県金沢市・輪島市

参加人数 10名

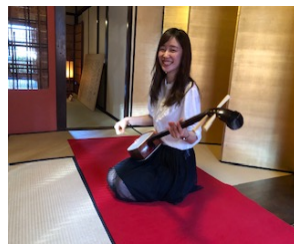
ついて、①金沢の街並み保存や職人の技術の継承に関する取り組みを学ぶこと、②現実の金沢の風景を確認し、文学作品による表象との差異を踏まえて、文字芸術の可能性を問い直すこと、③《伝統と暮らし》をテーマに、能登半島の自然と文化を捉えること、以上を目的としています。

コースのねらい

芸術文化が花開く金沢。雄大な自然に育まれた能登。本コースは、両者が抱えている文化継承の課題に

内容

初日は、金沢の三大文豪である泉鏡花、徳田秋聲らの作品舞台となった、浅野川流域を散策し、事前学習で分析した文学作品による表象と、自分たちが目にしている風景との差異について検討することによって理解を深めました。金沢の代表的な観光スポットでもある「ひがし茶屋街」では、1820年の創業以来、そのままの形を残す「志摩」でスタッフの方から解説を聞きました。徳田秋聲記念館では、学芸員の方に、徳田秋聲とその文学作品の全体像、ならびに文学館が抱える課題についてレクチャーを受けました。



「志摩」でスタッフの方に教わりながら三味線をひいてみる学生たち。

2日目の午前、金沢21世紀美術館で美術館の総務課の方に概要を学んだ後、美術館を見学しました。とかく伝統文化が喧伝される金沢ですが、現代美術を取り込んでいくことで、伝統の革新と未来のための文化創造を行っている新たな側面を発見しました。午後は、兼六園と妙立寺を訪れました。兼六園では、文人たちが取り上げた場所を中心に回りながら、それぞれの作品の描写をそれらに重ねました。特異な建築構造をもつ妙立寺では、幻想的な内容として知られる吉田健一『金沢』の舞台の1つとして選ばれた必然性について、文字通り体感を通じて考察を深めることができました。

兼六園の霞ヶ池の前にて



3日目の午前中は、「金澤町家研究会」のメンバーの方々のご案内で金沢町家が数多く残る地域を歩きました。金沢町家の構造、保存方法、そして現代生活と保存の両立の取り組みを学びました。午後は、金沢職人大学校と金沢市民芸術村を訪問しました。職人大学校では、伝統文化を継承していくにあたって不可欠な職人の技術向上をどのようにカリキュラムとして行っているのか、お話を伺いました。また、市民芸術村では、村長さんのお話から、文化によるまちづくりの意義を市民に理解してもらうためには、市民が文化の当事者になることが何よりも重要であることを、新たな知見として得ることができました。



「金澤町家研究会」の先生方のご案内で金澤町家を探訪。



塩田で、海水の入った桶を両肩で抱えてその重さを実感。

4日目は、能登半島の輪島市に移動して、「伝統と暮らし」の文化をテーマに学習しました。午前中は、白米千枚田と輪島塩を見学しました。白米千枚田では、海に望む圧倒的な景観に驚嘆しながらも、その背後に隠れる農業の持続可能性をめぐる問題を確認しました。輪島塩では、浜士の方から伝統的な揚浜式塩田と塩づくりについて説明を受けました。午後は、石川県漆芸美術館を訪れ、学芸員の方から漆芸の歴史や工法を学ぶとともに、作品について解説していただきながら、同時に輪島塗における伝統継承の困難さを伺いました。

学習を終えて

「金沢の抱えている問題や現状などを知り、観光地の金沢とは違う部分を見ることができました。伝統や文化を残すためにたくさんの方がどんな思いをもって、関わっているのかを知ることが出来てとても良かったです。また、事前学習で読んだ文学作品のモデルになっている場所をいくつか訪れました。想像した景色とは違ったりすることも面白かったですし、そのシーンが本当に見えてきてすごくワクワクすることもありました。事前学習で本を読んでいたからこそ、見えた景色だったと思います」（2年 奥田 結希乃）。

「私は今まで金沢市という町に対して有名観光地という印象しか抱いていませんでしたが、このFSに参加したことで金沢の良さに触れつつ、その裏にある課題や、町に魅力を持たせ続けるための人々の努力を知ることができました。今回のFSは自分にとって新たな視点から1つの町を眺めることができる本当に良い機会でしたし、これからの自分が何を学んでいくべきか考えさせられるとても有意義な時間を過ごすことができましたと思います」（1年 松澤 みずき）。